

して資本家を擁護するものである事を実証したのである。成程この争議は、労働者の敗北に終った。然しこの敗北は資本家、官憲、暴力団、の共同戦線が強く、労働者の階級意識が貧弱であった。我々の組織労働者又膨大な未組織労働者の階級意識が貧弱であった。この大なる敗北の原因である。更に部分的には評議会が争議基金を僅火であった事と、官憲が争議指導者の大衆的遠隔を行つたことと資本家が一部労働者を好餌を以て誘惑したこと等も大いに作用してゐる。然し此の争議は悲観的な方面許りであつた。誠然一面には大いに積極的、衆観的な方面もあつた。小作農民が求むる他を支出して争議団を支援したことは特に労働者が銘記しなければならぬことである。何故なら小作農民が労働者のストライキを物質的、精神的に支援したといふことは当然な事なりければならぬ、労働者、農民の融合を具體的闘争場面に於て農民の側から積極的に実現したといふことを意味するからである。此の専ら体験は今有益、発展させなければならぬものであると同時に、労働者は今迄よりモット、意識的積極的に小作農民と融合しなければならぬ。其の次に今回の争議は労働者の因結と階級的自覚の力が如何に偉大なものであるかを示した。

労働者の因結と階級的自覚を何うすることも出来ず。この労働者の力の前には、四十万円の損害と、五百万の警察費を消費するを余儀なくされたりである。之は労働者がもっと大胆に英國に自覚的に因結すれば労働者の地位向上は易々たるものであることを暗示するものである。

英国総罷業と沃枯争議。

沃枯の日本農器争議と前後して、全屯田を震撼させた、英国労働組合全英総評議会の指導による、英国労働者の総罷業が勃発した。英国は資本主義の先進国であることと労働運動が日和見主義者、改良主義者によって指導されて来たことを以て知られて来た国であるが、英国帝国主義の凋落による資本、收斂と労働階級の生活悪化とは英国労働者の階級意識を鮮明にし、一九二一年の「暗の金曜日」の経験は、抗夫攻撃に対して英國全労働階級として総罷業を以て答へしめたのである。然し政府、資本家、組織的、計画的、積極的な労働階級攻撃に対して右翼及び日